原 寛*：東亞植物雜考（其三）

Hiroshi HARA：Annotationes Miscellaneae ad Plantas Asiae-Orientalis (III).

20) **ナガサキマンネングサ** 肥前長崎附近に產する *Sedum* の一種を私は昭和12年以來ナガサキマンネングサ(*S. nagasakianum* Hara) と假稱し栽培して居る。その標本は昭和13年渡米の際持參して最も近いと思はれる中國產の *S. Alfredi* Hance と比較した。Gray Herb. には 'mons Nelumbii juxta fl. Canton, 3 Mai 1869, Hance no. 15605' と云ふ Isotype の標本があり，これは葉が互生し苞葉は倒卵形で成熟した蒴室は星狀に横へ開いて居る。ナガサキマンネングサは葉は時に對生又は三葉輪生し苞葉は狹く長楕圓形で蒴室は斜上して居るが，他の點はよく一致し別種ではない樣に思はれた。Maximowicz が 1863 年自ら長崎で採集し *S. Alfredi* Hance と鑑定したものは重複標本を見たが正にナガサキマンネングサである。Maxim. は *S. lineare* γ. *floribunda* Miquel も同一品と見做して居るがこれは疑がある。この植物を一先づ *S. Alfredi* の一地方形として整理しておきたいと思ふ。ナガサキマンネングサは Greatrex 氏から產地を異にする多數の生品を送られたが，その中には矮性で全體が小形のもの，又葉の細いもの等があつて可成りの變異が見られた。本種は又コモチマンネングサとも近緣であるが胎芽を生ずる事なく多年生で種子は成熟する。

尙同じく Greatrex 氏が長崎附近で採集し N. 38/41 として送つて來た生品はナガサキマンネングサに比し葉が明かに狹長で，萼片は少しく小形先端稍尖り，花瓣も稍狹長で子房は早く横に開出し，花柱は長く 1.5—1.7 mm ある。私はこれがツシママンネングサ(*S. Yabeanum* Makino) であつて，或はナガサキマンネングサと，同じく同地方に產するウンゼンマンネングサとの自然雜種ではないかと思つた。豐前黑岳にも同樣な形がある。これ等は更に精査する積で居たが不幸戰災によつて資料の大部を失つたので，ここに一應報告し今後再び材料が手に入つたらもつと詳しく調べて見たいと思ふ。

臺灣では *S. Alfredi* はコナシマンネングサ(山本 1926) として知られて居るが，私の手元には臺灣產の充分な材料がないので，その異同に就ては今述べる事を避ける。

21) **Vaccinium Fauriei Léveillé** (1913) この學名は Faurie 採集の朝鮮金剛山 (no. 663, Jun. 22, 1906) 產標本を基にして名付けられた。朝鮮森林植物編第8輯 (1919) ではクロマメノキの異名に入れられて居るが，Rehder (1934) はアクシバと見做し，最近 Sleumer (1941) はこの名に基いて *V. japonicum* var. *Fauriei* (Lév.)

* 東京大學理學部植物學教室

Sleumer の組合せを作り朝鮮産のアクシバに用ひて居る。アクシバは朝鮮では其後濟州島以外で採集された事がなく，私はこの同定に疑を持つたので，Merrill 教授に依賴してアーノルド樹木園に保管されて居る *V. Fauriei* Lév. の Holotype の寫眞を複製して送つて貰つた。原標本は花も實もない2本の枝からなり，一見アクシバとも極めてよく似て居るが仔細に眺めた末これはチョウセンウスノキ(*V. koreanum* Nakai 1922)であると確信するに至つた。*V. Fauriei* Lév. (1913) は同名が既に1911年ハワイ産の別植物に用ひられて居るので採用はできない。

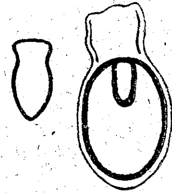
尙濟州島產のアクシバは內地產と比べて變種とする程の區別は無い樣に思はれる。序でながら中支產のホソバアクシバ(トウアクシバ)は前川博士の御說の如くアクシバと別種としてよいと考へるが，これには Léveillé の古い種名があるのでアクシバ屬を獨立に認めた場合は別項の如く *Hugeria vaccinioidea* (Lév.) Hara となる。臺灣產のランダイアクシバは內地のものより中國產に近くその一變種とするのがよいと思ふ。

22) **ヤチリンダウ** 樺太，馬群潭近くの泥火山地帶化沼周邊の濕地に珍稀なリンダウの一種が群落をなして生じ7月から開花する。最もチシマリンダウ (*Gentiana auriculata* Pallas) に近緣であるが，子房は柄を有し蕚は小形で花筒より遙かに短かく蕚裂片は狹く尖つて居る。概形は歐洲產の *G. solstitialis* Wettst. によく似るが，花冠內側の附屬片が著しく粗糙で，蕚裂片の尖り方が鈍い點等で異つて居る。この群は種の分け方が少し細かい樣に思はれるが，今迄に發表された何れとも一致しないのでここに記載しておく。

23) **シヤウジヤウバカマ** 本屬に就ては先に中井，小泉兩博士の御說があり，又本田博士は植物及動物 6: p. 1675–1680 (1938) で詳論されたが，更に明確にしておきたい點が二三ある。

1859年 A. Gray は本植物を新屬新種と認めて *Heloniopsis pauciflora* を記載した。この時に用ひられた基準標本は Gray Herbarium に現存し，又複品は U.S. National Herbarium にあつて，私は1939年に精査した。これは Cape Romanzoff (宗谷海峽野寒岬)で採集された古い蒴果を着けたシヤウジヤウバカマである。Gray Herb. にある標本は果莖が長く延びて 60 cm にも達する一株が斜めに貼られ，莖頂に尙3個の蒴果を着けて居るが種子は殘つて居ない。この標本臺紙の左上隅に Gray により鉛筆で精密に畫かれた蒴果の解剖圖が貼つてある。その直ぐ右に並んで四方から折り疊んだ紙包が貼りつけられて居て，その中には Gray が圖を描くのに用ひた解剖された2個のシヤウジヤウバカマの蒴果があり，更にゴミと共に種子が入つて居る。この種子は恐らく採集者 (Wright 又は Small) によつてシヤウジヤウバカマの標本に添へられて居たものであらうが，これこそ彼程の注意深い植物學者 Gray を誤らせ，更に後世學者の論議の元になつたのである。解剖圖にもこの種子は斷面圖迄添へて丁寧に書かれて居て，廣楕圓形で一端に種子の約半長ある截頭の種枕があり，紙袋中の種子はこの圖と全く符

合し，又原記載とも一致する。この種子がシヤウジヤウバカマのものでない事は現在の我々の知識からすれば極めて明白な事である。更に問題の紙包中を注意して探すと *Luzula* の蒴果一個と花一個が見出され，明かな花絲を有する點からヤマスズメノヒエ(*L. multiflora* Lejeune) のものであると思はれ，そうして問題の種子もヤマスズメノヒエに全く一致するのである。即ち果期のシヤウジヤウバカマの標本にヤマスズメノヒエの種子が紙包に入れて添へてあつたのを流石の Gray もこれを看破し得ず同一植物のものであると思つて新屬 *Heloniopsis* を記載したのである。従つてこれを現行命名規約に照すと明かに第 64 條に該當して *Heloniopsis* は失格する。Miquel が *Heloniopsis* の種子の記載に疑問を持ちシヤウジヤウバカマを *Sugerokia* なる新屬として改めて記載したのも誠に尤もな事である。併し *Sugerokia* より更に古い屬名 *Kozola* Rafin. (1837) があり，一方 *Heloniopsis* は各國の重要な文獻に多く用ひられて居り，又シヤウジヤウバカマ以外の意味に使用された事もないので，成可く用ひ慣れた屬名の變更を避ける第 21 條の趣旨から，私は *Heloniopsis* を保留屬名としたいと思ふ。この樣な例で最も甚しいのは *Cleyera* Thunb. で，基準標本がサカキの花枝とモクコクの果枝とよりなつて居るにも係らずサカキに對する保留屬名となされた場合である。



A. Gray の書いた *Heloniopsis* の種子の斷面圖を模寫したもの，即ちヤマスズメノヒエの種子

次にシロバナシヤウジヤウバカマはシヤウジヤウバカマの單なる白花品ではない。シロバナシヤウジヤウバカマでは花被片は白色で基部に向ひ漸次細くなり，花絲は盛花時花被片より超出し白く，葯は多少紫色を帶び，花柱も略白く，葉の縁邊は通常細かく皺縮して居る。シヤウジヤウバカマは花が通常少しく大きく花被片は淡紅色乃至紫紅色狹長で下半は細くなつて線形を呈し，内側は溝となつて花絲の下部を包み外側は基部少しく囊狀に膨らみ，花絲は盛花時花被片より短いか又は略同長で紅紫色，葯は少しく長く初め暗紅紫色を呈し，花柱は紅紫色，子房も汚紅紫色を帶びる。分布もずれて居り本州中部の山地や北部から北海道にかけては白花のものは知られず，一方シロバナシヤウジヤウバカマは近畿地方に多く，東京に近い處では關戸の丘陵に産する。

1867 年 Maximowicz は肥前溫泉岳で自ら採集したものに基き *H. breviscapa* を記載した。この學名は久しくシヤウジヤウバカマの異名に入れられて居たが，本田博士がツクシシヤウジヤウバカマとして區別されたのは確かに意義がある。溫泉岳附近のものは Greatrex 氏や外山三郎氏から多數の生品を送られ，更に大隅高隈山でも自分で採集栽培して見て，九州一圓に産するものは白花系の一型である事を確かめた。大體の性質はシロバナシヤウジヤウバカマに近いが，花被片は幅廣く概ね鈍頭で基部は楔狀に細まり，白質であるが多少淡紅色を帶び，花絲は盛花時花被と概ね同長又は稍長く，花被は花後黃綠色となり汚紅色又は汚橙色を帶び，葉も廣濶な事が多い。東京で栽培すると他

型に先だち最も早く開花する。屋久島の高地に産するものは全體が小形で一二花を着けるだけであるがツクシシヤウジヤウバカマの一型である。

扨て學名の問題になるが，シヤウジヤウバカマの諸型を凡て一種と見做した場合は *Heloniopsis orientalis* (Thunb.) Tanaka (Sep. 1925) がよい。*Heloniopsis japonica* Maxim. (1867) は *Scilla japonica* Thunb. (1784) に基いた組合せではなく *Sugerokia japonica* Miq. (1866)に基いた名である。それ故 *Heloniopsis* の下では *japonica* なる種名は 1866 年を出發點とし，*Scilla orientalis* Thunb. (1794) の方が種名として早い事になるからである。*Sugerokia japonica* Miq. は 1866 年新屬として發表され，その際には何等異名の引用なく主として水谷助六が採集した標本に基き，多分北日本にあるものと考へられた。Miq. は 1867 年に疑問符を附し Thunb. の名を引用して居るが，1870 年になつて初めて *Scilla japonica* Thunb. を異名に入れたので，Thunb. の種名に基く組合せとは考へられない。

白花系統をシヤウジヤウバカマと別種と考へる場合には，*H. breviscapa* Maxim. を起用したい。*Scilla japonica* Th. や *Sugerokia japonica* Miq. はシロバナシヤウジヤウバカマかも知れないがはつきりせず，Miq. も 1870 年には明かに白花系と紅紫花系を混合して居り，Maxim. は *H. japonica* (Miq.) の組合せを紅紫花系シヤウジヤウバカマに用ひたので，混亂を避け確實なものを採りたい。

シヤウジヤウバカマとシロバナシヤウジヤウバカマにはその中間の性質を示す様なものが存在し，或はこの二種は現在分化の途中にあるものとも考へられる。この點に關しもつと追及したかつたのであるが，戰災により各地から集めた生品も凡て燒失してしまつたのでここに今迄の觀察を述べて皆樣の御批判を仰ぐ事とした。

---

20) **Sedum Alfredi** Hance in Journ. Bot. 8 : 7 (1870).

var. **nagasakianum** Hara, var. nov.

S. Alfredi Hance sensu Maxim. in Bull. Acad. Sci. St.-Pétersb. 29 : 152 (1883), quoad pl. ex Nagasaki. *S. nagasakianum* Hara in sched.

Folia alterna, interdum opposita vel 3-verticillata, bractea oblonga. Petala 4—5 mm longa 1.2—1.5 mm lata. Antherae intense luteae. Folliculi stellatim erecto-patentes.

Hab. Kyushu. Prov. Hizen : circa Nagasaki (F. C. Greatrex, N. 34/34 ; N. 76/37 ; N. 22/39 ; N. 36/41—Typus); ibid. (Maxim. Iter. Sec. 1863 in Herb. Gray).

21) **Hugeria vaccinioidea** (Lév.) Hara, comb. nov.

Vaccinium japonicum Miq. sensu Forbes et Hemsley in Journ. Linn. Soc.

26 : 16 (1889)—Rehder et Wilson in Pl. Wilson. 1 : 562 (1913).

Agapetes vaccinioidea Léveillé in Bull. Acad. Géogr. Bot. 12 : 251 (1903).

Vaccinium siccum Léveillé et Vaniot in Fedde, Rep. 9 : 447 (1911).

Oxycoccoides japonicus var. *sinica* Nakai, Tr. & Shr. Jap. ed. 1. 168 (1922) ; in B. M. T. 38 : 40 (1924).

Vaccinium japonicum var. *sinicum* (Nakai) Rehder in Journ. Arn. Arb. 5 : 56 (1924) ; 15 : 288 (1934)—Sleumer in Engl., Bot. Jahrb. 71 : 491 (1941).

Hugeria sinica (Nakai) F. Maekawa in B. M. T. 47 : 615, f. 16 (1933).

H. japonica var. *sinica* (Nakai) Hand.-Mzt., Symb. Sin. 7-4, 799 (1936).

Dist. China media (Chekiang, Anhwei, Hupeh. Hunan, Kweichow, Szechuan).

var. **lasiostemon** (Hayata) Hara, comb. nov.

Vaccinium japonicum var. *lasiostemon* Hayata in Journ. Coll. Sci. Univ. Tokyo 30—1, 449 (1911) ; Icon. Pl. Form. 2 : 115, t. 12 (1912)—Sleumer, l. c. 490 (1941).

Oxycoccus japonicus var. *lasiostemon* (Hay.) Mak. et Nem., Fl. Jap. ed. 1, 409 (1925).

Hugeria japonica var. *lasiostemon* (Hay.) Sasaki, List. Pl. Form. 320 (1928).

H. randaiensis Masam. in Journ. Soc. Trop. Agr. 4 : 301 (1932), excl. syn.

H. lasiostemon (Hay.) F. Maek., l. c. 617 (1933)—Mori in Short. Fl. Formos. 159 (1936).

H. sinica var. *lasiostemon* (Hay.) Hatusima in Journ. Jap. Bot. 14 : 239 (1938). Dist. Formosa.

The type specimen of *Vaccinium Fauriei* Lév. (1913, not 1911) consists of two sterile branches of *V. koreanum* Nakai, and it is not identical with *Hugeria japonica* Nakai which has been known in Korea only from Quelpaert.

22) **Gentiana** (Amarella) **Sugawarae** Hara, nom. nov.

G. paludicola (non Gilg 1906) H. Koidzumi ex Sugawara, Pl. Saghal. 264 (1937), nom. nud.; Ill. Fl. Saghal. 4 : 1547, t. 708 (mala) (1940), cum descrip. jap.—Honda, Nom. Pl. Jap. 280 (1939), nom. nud.

G. sorstitialis Wettst. sensu Koidzumi in Acta Phytotax. et Geobot. 9 : 231 in textu (1940).

Proxima *G. auriculatam* Pallas, sed a qua ovario stipitato, calyce minore, et lobis calycis angustioribus acutioribus differt.

Caulis simplex vel ramosus 10—29 cm altus, internodis medianis valde elongatis. Folia mediana ovato-lanceolata (5)-10—20 mm longa (3)-4—6 mm lata

obtusa. Calycis tubus obconicus 3—6 mm longus; lobi 5 inaequales lanceolati-oblongi acuti vel obtusi laeves 2—8 mm longi 0.5—2 mm lati. Floris tubus calyce longe exsertus 12—17 mm longus ochroleucus; lobi 5 oblongi acuminati vel obtusiusculi 7—12 mm longi 2.5—5 mm lati violacei; coronae fimbriatae distincte scabrae. Ovarium longe stipitatum. Capsula stipitata corolla paullo exserta.

Nom. Jap. Yachi-rindō (H. Koidz. ex Sugawara 1937), Okuezo-rindō.

Sachalin. in humido circum Bakenuma prope Baguntan (M. Gozeki, 1933—Typus; Aug. 24, 1930; H. Sase, Aug. 13, 1933).

This plant, in general appearance, resembles to *G. solstitialis* Wettst. of Europe, but the latter has smooth and more dissected coronae, subsessile ovaries, and more acute and generally longer calyx-lobes.

23) **Heloniopsis** A. Gray, Bot. Jap. in Mem. Amer. Acad. ser. 2, VI, 416 (1859), excl. charact. seminum-Maxim. in Bull. Acad. Sci. St.-Pét. **11**: 436 (1867)—Baker in Journ. Linn. Soc. **17**: 459 (1879)—Dalla Torre et Harms, Gen. Siphon. 60, no. 952 (1900)—Krause in Engl., Pfl.-fam. Aufl. 2, **15** a: 259 (1930); **nomen conservandum propositum.**

Kozola Rafinesque, Fl. Tellur. 2: 25 (1837).

Sugerokia Miquel in Versl. Meded. Konink. Akad. Wetens. ser 2, II, 88 (1866); in Ann. Mus. Lugd.-Bat. 3: 207 (1867)—Koidzumi, Fl. Symb. Or.-Asia. 94 (1920).

Heloniopsis breviscapa Maximowicz in Bull. Acad. Sci. St.-Pét. **11**: 436 (1867)—Baker, l. c. 459 (1879).

Heloniopsis pauciflora A. Gray sensu Miquel, Ann. Mus. Lugd.-Bat. 3: 146 (1867).

Sugerokia japonica Miquel, ll. cc. (1866 & 67), p. p. ?; in Arch. Néerl. Sci. Nat. 5: 92 (1870), quoad pl. ex m. Wunzen.

Heloniopsis japonica var. *breviscapa* (Maxim.) Honda in Bot. & Zool. **6**: 1678 (1938).

Nom. Jap. Tsukushi-shōjōbakama (Honda 1938).

var. **yakusimensis** (Masam.) Hara, comb. nov.

H. japonica var. *yakusimensis* Masam. in Mem. Fac. Sci. & Agr. Taihok. Imp. Univ. **11**: 551 (1934).

H. yakusimensis (Masam.) Honda, l. c. 1679 (1938).

Sugerokia yakusimensis (Masam.) Koidzumi in Acta Phytotax. et Geo. **8**:

53 (1939).

Nom. Jap. Yakushima-shōjōbakama (Honda 1938).

var. **flavida** (Nakai) Hara, comb. nov.

H. japonica var. *flavida* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 47 : 243 (1933)–Honda, l. c. 1679 (1938).

? *Sugerokia nipponica* Ohwi in Bot. Mag. Tokyo 44 : 566 (1930).

? *Heloniopsis nipponica* (Ohwi) Nemoto, Fl. Jap. Suppl. 1058 (1936).

Nom. Jap. Kibana-shōjōbakama (Nakai 1933).

var. **albiflora** (Honda) Hara, comb. nov.

Sugerokia japonica Miq. sensu Koidzumi, l. c. 95 (1930), p. p.

H. japonica var. *grandiflora* Nakai, l. c. 243 (1933), excl. syn. Fr. et Sav.

H. japonica var. *albiflora* Honda, l. c. 1678 (1938).

H. japonica var. *tessellata* Nakai ex Honda, l. c. 1679 (1938).

Nom. Jap. Shirobana-shōjōbakama (Makino 1896).

○クスドイゲの語源 (前川文夫)

この木は西日本には自生して居るが揚子江の中流では里近くの雑木で，枝，殊に幹の下部の枝には針がやたらにあつて，その刺はサイカチのやうな枝打ちの針ではないが，出て居る方向が入り亂れて丁度猬(ハリネズミ)の背中の針を見るやうである。垣根のやうにでもなつて居たらくゞることなど思ひもよらない。その地方ではハリネズミも珍らしくないので兩者の間の聯想も可能なのである。日本內地には居ないが西日本は中國，朝鮮と交通も盛でこのおかしな動物を見る機會はかなりにあつた事だろう。猬の古名を類聚和名抄でみると「クサフ」といふとある。イゲはイガ(毬)で針のある植物に，殊に西日本には數種の刺のある植物に夫々名を止めて居ることトビトリイゲ(ジヤケツイバラ，肥後)，ヒヤーイゲ(テリハノイバラ，肥後)，ガンガライゲ(サルトリイバラ，豐前)，サルカケイゲ(同上，肥後)，カカライゲ(同上，薩摩)，ガメイゲ(同上，筑前)，サルトリイギ(同上，周防)，タロノイゲ(タラノキ，大和)，ソンノイゲ(カカツガユ，長崎)，シロイゲ(バラ，長崎)，イゲボタン(バラ) 等々の如くである。そこでこのクスドイゲもその刺の在り方からみてクサフを思ひ，クサフノイゲが轉約してクスノイゲ，さらにクスドイゲとなつたやうに思へる。クスノキのクスとは關係はないであらう。

上記のソンノイゲはカカツガユの異名とされて居るが，一つ氣にかゝることはツンベルグ氏の日本植物誌 (1784) の末尾に所屬不明の日本植物を百種程擧げて記載も多少付けてある中 (355 頁) に，ソンノイゲ (Son no Ige) がある。そして葉には鋸歯があり卵形であることや，針は紫色を帶びて居るなどと書いて居る。カカツガユの葉は楕圓形